

日常と文章は 相性がいい 綿矢りさ 小説家



Risa Wataya

わたや りさ 1984年京都市生まれ。高校在学中『インストール』で文藝賞を当時最年少の17歳で受賞しデビュー。早稲田大学教育学部国語国文学科在学中の2004年『蹴りたい背中』により19歳で芥川賞受賞。大学卒業後は専業作家として活動。12年『かわいそうだね?』で大江健三郎賞受賞。他の著書『私をくいとめて』『手のひらの京』『大地のゲーム』『憤死』『しょうがの味は熱い』『ひらいて』『勝手にふるえてろ』など。14年12月結婚。1才半の男児の母。なお『勝手にふるえてろ』(文春文庫刊)は映画化され、17年全国公開予定。

日常を描くのが好き。気にも留めない日常に、いろんな発見がある。映像だとずっと同じシーンが続けど、文字で丁寧に紡いでいくと、いろんなものが表れる。日常と文章は相性がいい。

日常を描く上で、丁寧さを大切にしている。つぶさなことを見逃してしまうと、平坦になるから、細かすぎるくらい細かいことも書く。登場人物の心の動きも、想像と重ねて綴る。それが読者に「わかるわかる」と言っていただけの理由の一つと思っている。

昨秋上梓した『手のひらの京』は、生まれ育った京都そして家族を描いた初めての作品。京都を離れた今、京都の風景・風情をもっとみんなに知ってほしいと思い、普段自分が話している京都弁で綴り、京都に住んでいたときの気持ちを追いながら書き上げた。「わかるわ〜」と言ってくださる関西の方、「京都に行きたくなった!」という声も多く、とても嬉しい。

プロットを練ってから書き始めるタイプではなく、編み物的というか、ちょっとずつ先が見えていくような書き方をしているので、思いがけない展開に自分で驚くこともあれば、「あ、話が止まった…」と愕然とすることも。いい感じで書けていたのに、ふいに行き詰まってしまい、破棄したこともある。

それだけに、ラストが見えてくると、ちょっと焦って、「もうすぐ終わる、急いで書かな!」とサーッと書き上げたい。もう少し辛抱強く、急ぐ気持ちをぐっと堪えて落ち着いて、話を閉じられるようにしたい。

1年半前に長男を出産し、「人の命はこうやって紡がれてきたのか」とただただ思う。子供は私のライフスタイルを変えた。健康優先、食べ物にも気をつけるように、そして仕事の仕方も変わったように思う。この経験はいずれまた。リアルタイムで書くのは難しいから、タイミングを待とうかなと。【**響**】

CONTENTS

02 Person 人・明日をつくる

日常と文章は相性がいい
綿矢りさ

03 [鼎談] 基軸を探る

原子力発電を再考する

石川和男 / 村上朋子 / 秋元圭吾

18 オピニオン

原子力発電への視点

安全性

「事故の記憶・教訓・危機感を、世代を超えて伝承する」中島 健

世界

「現実的選択——世界の原子力発電事情」東海邦博

社会

「ものさし不在の時代、立ち止まり考える勇気を」先崎彰容

25 旬発NIPPON

やまとし うるはし、おもしろし

——「第32回国民文化祭・なら2017」「第17回全国障害者芸術・文化祭なら大会」

29 特別企画

たゆまぬ安全性向上へ

——大飯発電所のいま